愛知県被災者支援センターニュース 第26号 平成24年10月25日発行

あおぞら

発行 ： 愛知県被災者支援センター
住所 ： 名古屋市中区三の丸 3-2-1
愛知県東大手庁舎 1階
TEL ： 052-954-6722
FAX ： 052-954-6993
開館 ： 月～金 10～17時

交流会に参加して
ふるさと交流会 in Nissin - バーベキュー大会 -

福島県郡山市から自主避難をしてきてから初めての交流会の参加は、夏休みの高山 2泊 3日のキャンプでした。小学 4年生の娘がキャンプに行きたいというので、交流会は初めてでかなりドキドキしながらでしたが、参加を決めましました。名古屋YMCA主催キャンプで、バーベキュー、虫取り、川遊び、野外自炊、流しそうめん、と盛り沢山のプログラムで、特に夜のキャンプファイヤーで見た、満天の星空は感動的でした。あっという間の 3日間、親子共々楽しく過ごすことができました。

交流会 2回目の参加は､北区役所での｢お茶っこサロン｣でした。綿菓子、水風船、バルーンアート、折り紙、絵本を読んで下さったりと、ボランティアの方が子どもの面倒を見ていただけたので、キャンプでお知りあいになった方とも、またゆっくりお話する事ができました。

（あおぞら 第25号 5ページ 参照）

3回目は、日進市の愛知牧場にある「南山教会」でのバーベキューです。盛り沢山のバーベキューをご馳走になりました。日進で採れた新米のおにぎりが、とってもおいしかったです。娘はキャンプで一緒だったお友達と再会もでき、ボランティアの方々に牧場に遊びに連れて行ってもらったり、プラ板作りと楽しそうでした。その後教会内に場所を移動して、コーヒー、フルーツ、ケーキをいただきながら、腹話術を見せていただいたり、歌を歌ったりしながら、おしゃべりを楽しみました。

（2012年10月 6日開催）

初めて交流会に参加する時は、正直勇気が要りましたが、必ずどなたかが声を掛けて下さり、少しずつですが知り合いの方も増えました。自主避難によりお別れする事が多かったのですが、交流会で新しい出会いもありました。

まだ交流会に参加された事が無い方も、交流会とかまえる事無く、軽い気持ちで遊びに行かれると良いのではと思います。

いつも色々準備、企画して下さる方々に感謝の気持ちで一杯です。

（M.M. 天白区在住）



お肉が焼けるのを待ちきれな～い!!



日進市長にごあいさついただきました



南山教会で腹話術を

防災フェスタ in テレビ塔

楽しいお祭り『防災フェスタ 2012 in 名古屋テレビ塔』は、地元愛知・名古屋を中心とする防災に関するイベントです。今年も、東日本大震災で被災された方々を息長く支援することの必要性を強く発信するとともに、決して他人事ではなく、警戒される東海・東南海・南海地震に向けた備えの再点検の場として、愛知・名古屋にお住まいの方々へ防災・減災の大切さをアピールする場です。

プレ企画の翌 29 日は、チャリティーバザーやステージ、お茶っこサロンなど、盛り沢山の企画で多くの方に楽しんでいただきました。



去る 9 月 28 日（金）、「特定非営利活動法人レスキューストックヤード」が主催する、防災フェスタのプレ企画に、パネリストとして参加させていただきました。人前で話すことに抵抗があった私ですが、皆様の支えもありなんとか大役を果たすことができました。

他のパネリストとして、岩手県大槌町から「おらがおおづち夢広場・復興食堂」店長 岩間 美和 氏、宮城県七ヶ浜町から「七ヶ浜 七の市商店街」代表 星 仁 氏、福島県浪江町から「特定非営利活動法人 まちづくり NPO 新町なみえ」理事 原田 雄一 氏と、皆さん遠いところから参加されていました。同じ被災者であっても、今直面している悩みやおかれている状況は全く異なっていますし、復興へ向けての思いや活動もさまざまで、お話を伺っている間驚きの連続でした。ふだんなかなか関わりを持つことのできない方達と出会い、意見交換ができたことともても感謝しています。

会の最後に、「レスキューストックヤード」の代表理事 栗田 暢之 氏が、「息の長い支援をしていきたい」とおっしゃられていたのが、とても印象に残りました。被災地の再建は、まだまだこれからです。課題も沢山山積です。震災のことが風化していく、これからが本当の支援になるのだと感じました。

私たちが、今回のような場にどんどん参加していくことで、少しでも支援の輪が広がればいいなぁ、と思いました。

（高橋 貴子 南区在住）



防災フェスタ 2012
in 名古屋テレビ塔
9 月 29 日（土）の様子









飛島村芋掘り交流会（2012年10月7日）
子ども達も夢中で掘ってました



みんなが待ってた、さつまいも掘り!!　思いが通じたのか晴天。苗植えの時より早く全員集合。10月30分、いよいよ芋掘りスタート!!　伊藤さんから教えて頂いたように、芋づるを上に引っ張り、取り残しがないように回りを掘って。子ども達も夢中で掘ってました。その結果、一ヵ所に4～6本できていて、予想以上の大収穫となりました!!　頑張ったら、お腹が減っちゃった～　と思ってたら、「焼き芋できたよ～」と呼ぶ声!?　アツアツをモグモグ美味し～い（^q^）

そのまま昼食に。素麺とBBQが用意されて、至れり尽くせり!!　みんなの会話も弾んで、楽しい一時に。さらに飛島村の村長御夫妻も、お忙しいなか足を運んで頂き、差し入れまで。その上、昨年同様に被災者全員にお米を頂けるとの事!!　また、帰りには伊藤さんからお米、西尾さんからお野菜と、たくさんのお土産と思い出を頂きました。



当日、朝6時から焼き芋の準備を西尾さん御夫妻が、素麺、BBQ等の用意を伊藤さん御夫妻とご家族とご近所の奥様方、と大変お世話になりました。ありがとうございました。そして、参加者の皆様お疲れ様でした。

最後に…　当日、体調不良のために不参加でしたが、子ども達とみんなの笑顔のために、畑を借りてこの企画を実行をしてくださった、園田さん御夫妻、早く元気になって下さいね。お陰様でみんな笑顔になりましたよ!!　皆様への感謝と共に、「来年もあると良いなぁ」と思いました。

（松山　要　一宮市在住）

お宅訪問記

愛知県被災者支援センターでは、交流会等にあまり参加してみえない方を中心に、避難先の市町村とも相談して、今年の2月からそれぞれのご家庭を訪問させていただいています。

9月20日には宮城県石巻市から瀬戸市に避難されている阿部智子さん宅に、支援センターの瀧川と一緒に訪問させていただきました。

阿部さんは87歳ですが、とてもお元気で、ご自分のまわりの方を「宝娘（たからむすめ）さん」とお呼びになって友達にしてしまう、不思議な性格の持ち主です。市役所、デイサービス、病院の職員も全部友達です。地域の聖霊中学校の生徒とも交流されています。

今回は2度目の訪問ですが、電話や手紙でもお つき合いさせてもらい、まるで実家のおふくろさんのような方です。津波で多くを失われたにも拘らず、「神様に助けられた命」「恩返し」と言ってみなさんに接しておられます。訪問した日も朝6時から昼食の準備をされ、もてなしていただきました。来年は石巻に帰れるかもしれないとのこと、何よりです。（ちょっぴり寂しい思い!）

愛知県に避難された方が、地域とふれあい、溶け込んで暮らせることを願って、今後も訪問の輪を広げていきたいと思います。何よりも私たちのほうが勉強の毎日です。

パーソナルサポート支援チーム
南医療生協　おたがいさま係　係長
仲田法子

愛フェス2012 & 愛ファザWalk 報告

9月29日（土）、愛知県長久手市にある愛・地球博記念公園（通称 モリコロパーク）にて、〝楽しむことが誰かのためになる〟、がコンセプトの「愛フェス」というイベントを開催しました。来場者は17,200名。岩手県気仙地区に暮らす方々や愛知に避難された方々も、あわせて40人以上参加をされました。

トヨタグループのボランティアや、東北のNPOが、岩手県の物産品を販売しました。去年に引き続き、岩手県大船渡の名物〝さんま祭り〟も開催され、長蛇の列となりました。







夕方には岩手県気仙地区で復興の最前線で活躍する地域住民の方をお招きした、気仙地区シンポジウムも開催しました。

親子や仲間で、帰宅支援ルートを歩く、「愛ファザWalk」も開催しました。去年に引き続き、今年も愛知県に避難された方々にもご参加いただきました。愛フェス会場、愛ファザWalk特設ゴールエリアでは、たくさんの方がハイタッチや拍手でお出迎えをし、Walk参加者の感動の瞬間をともに分かち合いました。



〝楽しむ〟要素ももりだくさんでした。野外音楽フェスでは人気の無料ライブや、〝丁寧な暮らし〟を大切にする食べ物や雑貨、素材などを販売している人気ショップなど、約77のブースからなる「市場日和」には、ベビーカーを押した家族連れがたくさんいらっしゃいました。

〝市場日和〟で買い物をすると、投票券をもらうことができます。会場内では愛知県を中心に全国で活躍する約40のNPOが、子どもたちが楽しめるようなコンテンツを用意しながら自分たちの活動をPRしていました。もらった投票券を気に入ったNPOに投票することで、それぞれの団体に寄付金が分配される仕組みで、それぞれの活動の支援につながります。





にぎやかな会場で〝楽しさ〟と〝社会貢献〟を実感していただける、素敵なイベントになったのではないかと思います。

（愛フェス2012開催委員会）

第２回 囲碁クラブ開催します！

新聞などでプロの方が対局した碁盤を見ても、知識がない方にとっては、どっちが優勢なのかはっきりわかりませんから、ちょっととっつきにくい印象があります。でも、黒白交互に打っていき、最終的に石で囲んだ陣地の大きさで勝負を決める、とルールはいたってシンプルな、とても気軽に楽しめる娯楽の一つです。

この囲碁を通じて、和気あいあいと過ごす、新たな交流の輪を広げるため、囲碁クラブを立ち上げました。

公益財団法人日本棋院中部総本部の全面的なご協力をいただき、当日、棋院所属の棋士の方にご参加いただけるかもしれません（第１回は、松本 なよ子 棋士にご指導をいただきました）。

腕に覚えのある方だけでなく、以前から興味はあったけどちょっと気が引けて… という方など、老若男女問わずどなたでも参加できますので、ぜひ第２回目の囲碁クラブにお集まりください。

日 時 ： 11月23日（土）午後 1時～午後 5時
場 所 ： 日本棋院中部総本部（名古屋市東区撞木町1-19）
問合せ・お申込み ： 愛知県被災者支援センターまで。（詳細は同封のチラシをご覧ください）

福島の子ども保養プロジェクトを継続するために
～「みんなで考える集い」を開催して ～

震災から 1 年半が過ぎた 9 月。福島の子ども保養プロジェクトを継続するために「みんなで考える集い」を、企画運営した団体に呼び掛けました。その後、関係者の協力を得て、10 月 6 日岡崎市福祉会館にて開催することができました。その内容について、ご報告いたします。

この夏、愛知県内で様々な団体が、福島から子ども達とその家族を東海地方（愛知、岐阜、三重）に招待し、心身ともにリフレッシュする機会をつくりだしました。その中の一つ、岡崎市で開催された「福島のみんな！ あそびにおいでんプロジェクト」に私もスタッフとして参加させていただきました。一緒に活動を進めていくうちに様々な問題点、課題が浮上してきました。それでも、福島の子ども達のために何かしたいという方、関心のある方が、福島から 500 キロ以上離れたここ東海に沢山いらっしゃいます。そのような支援したい人の気持ちを大切に、情報を共有し、連携する仕組みが必要になります。

さらに、6 月に成立した「子ども・被災者支援法」に支援者の意見を反映するために方向性を確認し、意見を調整する機会が必要と考え、各団体に呼び掛けました。

今回の集まりに、遠く岐阜県下呂市から参加する方もいましたし、また、急なご案内にも関わらず参加する方もいました。

今回の参加団体は、11 団体

① 愛チカラ（名古屋・大学生中心）
② いのちと未来を守る愛知の会（今後、活動予定）
③ 東北応援団東三河（新城・④と共同開催）
④ 子どもたちの未来と食を考える新城ネットワーク（新城・③と共同開催）
⑤ 愛知県被災者支援センター
⑥ K.I. プロジェクト（岐阜県美濃加茂市・⑦と高山市の団体と連携し活動）
⑦ 日進まちづくりの会（日進・⑥と高山市の団体と連携し活動）
⑧ みなみそうまサラダプロジェクト（幸田から福島に野菜を送る。移住援助を予定）
⑨ 名古屋 YWCA 被災者支援プロジェクト（名古屋・知多で保養）
⑩ 21st century Ship 海旅団（名古屋・岐阜で保養）
⑪ あそびにおいでん！ プロジェクト in 愛知実行委員会（岡崎・幼児のママ中心）

この他にも、春日井「雨にも負けずプロジェクト」、日本福祉大ボランティアセンター「福島子どもリフレッシュサマーキャンプ 2012」がありますし、三重県でも活動されている団体もあります。

最初に私が呼び掛けの経緯をお話し、その後、参加者の自己紹介と各団体の活動報告をしていただきました。

議題には、施設（受け入れ場所）、行政支援、食材提供、受け入れ側に被災者の参加、被災者との交流について、ネットワーク等があげられ、自由に討論していただきました。

【施設】公共的な施設は、目的が明確にされているため、保養目的に使用を許可できないと断られるなど、柔軟な対応が受けられない団体もありました。が、知り合いの山の家を借りて 40 名位受け入れた団体もありました。企業の研修施設、空き家での受け入れについても検討している団体もありました。

【行政支援】岐阜県、高山市、美濃市、岡崎市、東栄町は協力的でした。補助金を出した市もありました。

【食材提供】道の駅、JA 愛知東、有機農家、NPO による食材提供があり、集まりすぎて、被災地に送る団体もありました。

【受け入れ側に被災者がいるか、交流はあるか】福島大学のボランティアが参加、子どものいる被災者が受け入れ側に参加する団体もありましたが、表に出にくい事情を考慮し、被災者には呼び掛けていない団体もありました。

【ネットワーク】情報を共有するために、メーリングリストを作成することになりました。

その後、会食をしながら、色々なエピソードがでてきました。放射能に対する不安が解消され、泣き出すお母さん。「僕たちのことが、珍しくて見に来たんでしょ？」と言う小学生。細やかな対応が求められていることを切実に感じ、改めて参加者の皆様に保養の継続をお願いいたしました。今回は、非常に有意義な集まりとなり、今後の活動につなぐネットワークを築く機会になりました。ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

（呼び掛け人 小松恵利子）

特別寄稿

東京官邸前 脱原発を訴えるデモに参加して

朝夕寒さを感じるようになりました。皆様いかがお過ごしですか？　早いもので私も福島県から愛知県に来て１年６ヵ月以上が過ぎ、少しずつ愛知県に慣れてきました。しかし故郷を思う気持ちは皆様と同じでございます。

去る 10 月 5 日、私は、毎週金曜日に東京官邸前で行われている脱原発を訴えるデモに参加して参りました。

今回『あおぞら』に掲載させて頂く機会を頂きましたので、デモの様子と 10 月 6 日に一時帰宅して撮影した現地の様子を報告します。



震災から今月 11 日で１年７ヵ月になりますが、未だに望まない避難生活の中、住みなれた故郷を離れ、全国各地に避難している大勢の人々の気持ちを考えると、一言では言えないそれぞれの 1 年 7 ヵ月であったと思います。

そんな中、今回私は、デモ参加に向けて、家族全員で揃いの T シャツを作成しました。

そのＴシャツのプリントには、双葉町の中心街にある私が小学校 6 年生の時に考案した『原子力明るい未来のエネルギー』の標語看板の前で、『明るい』の部分を『破滅』に訂正した時の写真に、赤い文字で脱原発とプリントしたデザインです。

標語訂正の経緯とデモに参加しようとしたきっかけは繋がっており、原発事故により、標語の言葉の現実と違う未来が 24 年後に起きて、原発を推進してきた町の出身者として、標語考案者として複雑な思いで生活してきました。



そこで私は今年の 7 月 15 日、双葉町の 4 巡目の一時帰宅の際、ある決意をして帰りました。原発事故により人が誰も住んでいない町の中心街の標語で、原子力『明るい未来』のままではおかしい。



私は今年の 3.11 の震災から丁度１年の時、愛知県豊橋市の浜岡原発反対のデモに参加しました。

そこで「原子力は破滅未来のエネルギーです」とマイクを持ち、訂正しました。そして、私は標語看板を訂正する方法はないかと考え、一時帰宅の際、画用紙に『破滅』と書き、標語看板の前で画用紙を掲げました。すると、遠近法により『明るい』の文字が消えて『破滅』に変わり、26 年後の訂正が実現しました。

安心、安全を前提に推進してきた双葉町が、原発事故により、安全神話が崩壊され、未だに帰れない日々と、帰還できるメドが立っていない現実に、原発推進は間違っていたと確信し、考え方が 180 度変わりました。脱原発を行動で示そうと、デモに参加しようと決めたのです。



原発ゼロが閣議決定されなかった現実や、青森県大間原発建設再開問題。大飯原発再稼働問題、そして浜岡原発では津浪対策の為に防潮堤を築き、いかにも安全性を訴えるようなイメージから、福島の原発事故を置き去りに、反面、原発の新しい安全神話を作ろうと感じられます。今後の原発に対する国の今の対応に不信感を抱きました。

私は、資源のない日本に、原子力に依存し、原子力で失敗した現実から、再生可能エネルギー 100% の未来や、余剰電力で助け合う社会を特に訴えたくて参加したのがきっかけでしたが、その中で、数多くの被災者の担当をしてきた、愛知県被災者センター事務局長の瀧川さん


富岡町　野生のイノブタ

が考えた言葉から、同じ避難生活をしている方達の色々な思いがそこに詰まっており、デモに参加したいけど、忙しくて行けない方や、東日本大震災により愛知県に避難して来ている多くの方のそれぞれの思いを背負うつもりで参加したいと思うようになりました。

そして今月、安城学園高校で行われたシンポジウムで、原発、東北の震災復興、沖縄問題、私学の学費の公私格差問題について、未来を考えるシンポジウムに参加した事をきっかけに、地域により同じ日本でも、それぞれの当事者が抱えている社会問題があり、違う問題も日本全体、同じ国民全体の問題と考え、東北復興、原発、沖縄、私学公私格差問題と、みんなの思いを一つに、自分の視点から言葉を画用紙に書いて官邸前でメッセージを掲げたいと思いました。


富岡町　田んぼにブタクサの花が生い茂るいたるところ黄色の雑草におおわれていた

そして最後に、官邸前のデモは脱原発がテーマでしたので、私はデモの最前列、官邸前でマイクを持たせていただき、参加者全員に聞こえるスピーカーを通して『原子力破滅未来のエネルギー』と叫び、官邸前にその訂正された標語が響きました。

参加者みんなの気持ちが一つになり、そして最後は僕をおいかけて来て「頑張れよ」と言ってくれた方や、拍手してくれた方、そして愛知県から来たと話をしたら「愛知から来たの？」と驚いていたのが印象的でした。長い列を作って脱原発を訴える一人ひとりの思いがあり、一人よりも二人、大勢集まれば、きっとその思いは国政に届く事を信じたいと思います。


大熊町の旧国道
電柱と電線に草のつるが巻きつき荒れ果てていた


大熊町のモニタリングポスト　放射線量 33μSv

震災を風化させない為には、新聞、テレビなどのメディアを通して、その現実を伝える事で、多くの方に知っていただけると考え、取材される機会があれば取材を受け、自ら情報発信や行動で震災を伝えています。昨年から愛知県内で講演を頼まれる機会が増え、月に１～２回講演をして原発事故の現実を伝える事で、防災や、その警戒区域の現実を少しでも多くの方に知ってもらおうと、写真や映像で記録し、その都度、新しい資料を加えながら伝えております。そしていつか子どもに伝える為に、今回、これから大人になり社会を背負う我が子にもデモ参加の足跡を残しました。


富岡町の中学校の校舎　グランドには汚染土が黒のシートにつつまれて置かれていた

一時帰宅をして感じた事は、警戒区域内の中にはモニタリングポストが設置されており、高い所で33マイクロシーベルトあります。首にかけていた被ばく線量計の数値がどんどん上がり被爆するのを目の前に、とても人が住める線量ではありませんでした。

これからも一時帰宅の合間、故郷の記録を続け、機会がありましたら、資料提供し、故郷に中々帰れない皆様に懐かしい故郷の今とその現実も伝え、故郷を思う気持ちを大切にできたらと思いました。今回はこの『あおぞら』で皆様に、報告させて頂き本当にありがとうございました。皆様もどうぞご自愛ください。

（大沼勇治 安城市在住）

学習会「チェルノブイリから今を考える」要約

日　程 ： 2012 年 6 月 4 日（水）14:00 ～ 15:30
場　所 ： 南医療生協
主　催 ： 愛知県被災者支援センター パーソナルサポート支援チーム
参加者 ： 104 名（募集席は 100 名）
　　避難者 24 名、一般 80 名。会場は隅々まで参加者で溢れました。

福島第一原発事故の影響は、長く続きます。

1986 年にソ連チェルノブイリで起きた、原発事故から学ぶことが多いと思われます。1990 年からチェルノブイリの支援を続けてきた、「特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部」理事の河田さんからお話をお聞きして、福島との比較をしながら、今私たちが考えるべきこと、なすべきことを共に考えていくための学習会を行ないました。

※〈あおぞら 第 22 号 5 ～ 6 ページ参照〉

【講演内容】

◆チェルノブイリの場合は事故後に鉄とコンクリートの覆い（石棺）で原発を覆ったが、それが 26 年経って穴が開き、さらに対策をする必要がある。原発事故というのは、一旦起こってしまうと何十年も管理に多大な労力とお金がかかってしまう。

◆原発事故による放射能汚染の特徴は、原発から放射能の雲が飛び出し、風に乗って汚染がすぐに広がること。事故発生時にたまたま吹いていた風の風速・風向きが、その後の命運を決めてしまう。

◆原発事故による被害は､内部被曝が大きな要因。遮蔽物を置いて防ぐことができないので影響が大きい。チェルノブイリ時には最初は粉塵、時間が経つと食物・飲物によって内部被曝が起こった。その違いが起こる原因は、汚染された粉塵が雨で次第に地中に浸透し、植物の根から吸収されるためである。

◆居住禁止区域の基準は、チェルノブイリより日本の方が遥かに緩い。年間 20mSv が基準だが、本当は 5mSv を超えるようなところには住んではいけない。汚染の傾向として、海側は非常に汚染レベルが低いが山側は極めて高い。食品では、梅・お茶・キノコ・柑橘類が高く、根菜・ネギ類・リンゴは低い。米は精米すると数値が下がる。

◆放射能の影響には DNA を傷つける直接的影響と、フリーラジカルという過激な物質を体内に発生させる間接的影響がある。直接的影響の対策は、ペクチンなどセシウムを吸着する物質を食べ、できるだけ早く体外に排出すること。間接的影響の対策は、フリーラジカルを消滅させるビタミン・カロチン等を摂取すること。

◆毎日 1Bq 食べていると、体全体で乳児なら 30Bq、大人なら 140Bq 溜まる。ただ、一旦汚染した身体に汚染されていない食べ物を与え続けることで、数値が減る（生物学的半減期）。そのため、子どもを汚染していない地域に一定期間避難させることにはそれなりに効果がある。

◆内部被曝の基準を、政府は Sv で評価するが、ベラルーシの研究者バンダジェフスキーは Bq で評価する。Bq では恐ろしい値でも Sv だと年間 1mSv の基準値の範囲内になってしまう。

◆バンダジェフスキーの基準内におさめるには、大人も子どもも 1 日 10Bq 以下を守ること。国の食品基準値は物による差がないが、ウクライナの食品基準値は、日常摂取する飲み物・食べ物は厳しく、それ以外は少々高くても良いという現実に則した基準になっている。日本の基準を守っても、1 日 10Bq は守れない。

◆実際には 10Bq を超える人は福島でも恐らく滅多にいないが、事故後汚染の高い時期に危険領域の人がいたというデータがある。ただ、Bq では危険領域だが、新聞発表は安全値の Sv に操作されている。安全だと信用させられているのが大きな問題だと思う。

◆内部被曝の結果おこる病気は、実はガン・白血病は 1 割以下。ほとんどは心臓病、脳血管病、糖尿病などの成人病。ウクライナでは、事故から 4、5 年してから大人の様々な病気が急に増加し、子どもでも成人病になっている。そういう事態にならないように、我々はすでに述べたような工夫・対策をこれから講じて、チェルノブイリの二の舞を踏まないようにしないといけない。

【質疑応答】

Q ： ガン以外の病気が多いと初めて知った。今後福島原発の影響でそのような病気が発症した場合、因果関係を証明できないのでは。

A ： とても大きな問題。ガンばかり取り上げられるのは歴史的背景がある。IAEA が許可しなかったため、チェルノブイリ時のガン以外の病気の状況の記録は西側には残っていない。そうならないように日本では今後きちんと監視していくべき。

放射能に由来する病気というのはない。すべての病気が増加するというのが放射能の影響である。

Q ： チェルノブイリ周辺の成人病の発症の割合は、日本の何倍くらいか。

A ： 倍率は不明。若い人に症状が出るということが特徴。20 代で原発に行った消防士が、50 代で続々と心臓病・脳血管病で亡くなっている。

Q ： 将来の病気の心配もあるが、今できる対策は。

A ： ベラルーシの専門家は心電図を定期的にとることを勧めている。成人病が多いということは、逆に言えば対策が可能な病気であるということ。病気は増えるが過度に怖がる必要はない。どうやって早めに症状をキャッチして対策を取るかということが重要。

Q ： 福島の子ども達が長期の休みに愛知来るのを繰り返す、というのは有効な対策か。

A ： 意味がある。特に 1、2 年の間は粉塵が大問題。食べ物は気を付けても現地で生活していれば空気は吸ってしまうので、場所を変えることでしか防げない。早い時期の方が効果がある。

また、精神的な問題もある。外遊びの禁止がストレスになっている。

Q ： 20km 圏内の方が福島へ帰ることは可能なのか。

A ： 厳しい状況だが汚染マップを作って、できれば 1mSv 以下、最低 5mSv 以下になるような状況であれば帰ることは可能。汚染の推移を見て判断する。

Q ： 家を除染しても数値が下がるのは一時的。冬は飯舘村方面の山からの吹きおろしがあるが、その時に汚染物が一緒に飛んでくるのか。

A ： その通りで非常に大きな問題。論理的には山の落ち葉を全部掻き集めて処分するしかない。今のうちは落ち葉だけだが、地中に沈むと木の根から吸収され循環する。そうなると半減期で自然に減るのを待つしかない。山から吹く風の影響については今後汚染マップで確認していく。

Q ： 道路の溝の堆積物から粉塵が舞って、内部被曝するというのはどうしたらよいか。

A ： 地面に積もった塵や苔から優先的に除染する必要があるが、なかなか実現されない。

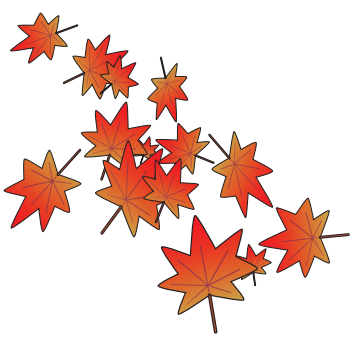
Q ： 上の子の心臓の検査の結果が今は良好でも、これから被曝によって悪い影響が出るのか。

A ： 将来の影響についてはなってみないと分からない。できるだけ影響を減らすという対策しかない。

福島での甲状腺検査の結果心配ないと言われた子ども達も、きちんと推移を見守り、兆候があったらすぐに対応する必要がある。

注 ： Sv = シーベルト、Bq = ベクレル

（まとめ ： 愛知県被災者支援センター
ボランティア）



10月13日（土）福島県郡山市で
「原発事故子ども・被災者支援法 福島フォー ラム」が開かれました

「原発事故子ども・被災者支援法」とは、今年6月に成立した法律ですが、原発事故の被害者－とくに妊婦や子ども－が、”支援対象地域”にとどまらざるを得ない場合も、”支援対象地域”から避難した場合も、さらに避難先から地元に戻る場合でも、いずれも一人ひとりが選択する権利を認め、それぞれに住まいや医療・健康、移動などを国の責任で支援することを義務付けた、画期的な法律です。国会の全会派が議員立法で共同提案し、6月に全会一致の賛成で成立しました。

議員立法で成立した法律なので、国が基本計画をつくり予算措置をとらないと、実効性がうまれません。そのため「原発事故子ども・被災者支援法ネットワーク」が発足しており「被害者や自治体、支援者等の切実な訴えを政府に届けて、真に被害者の方々のためになる支援策を実現する」ことを目的として、9月 5日には東京で、10月13日には福島でフォーラムが開かれているものです。

福島フォーラムには、議員立法で法案をまとめる中心になった国会議員も、支援法を具体化する復興庁の政務官や参事官も、参加して開かれました。17時半から始まって、福島県弁護士会、福島県内の被災・避難者、福島県以外の避難者、支援組織、市町村長、新潟県・愛知県など30を超える発言が続き、あっという間に 3時間がすぎました。

福島から札幌に避難している若い女性は「（原発事故について）彼氏・彼女と本音で話せる場をつくっている」ことを紹介しました。栃木県から避難されている井川 景子 氏は、福島県以外の県からの避難者を代表する立場で、「被害をうけたのは福島県だけでなく、みんなが苦しい思いをしています」と、全国のつながりを訴えて注目されました。

愛知県被災者支援センター（パーソナルサポート支援チーム）からは、これまでの経験、愛知に避難された方の声やアンケートなどを基に、「支援法を具体化するための提言（素案）」を準備。会場で配布し、ポイントを発表しました。この提言は、法律相談や損害賠償請求に関わってきた弁護士・弁護団・司法書士や、医療・健康相談に参加した医療関係者、また身近な地域で関わっている社会福祉協議会やNPO、生協、また行政関係者などが意見を持ち寄って作成しました。まだ素案ですが、「バランスがとれた内容」「完成度が高い」「医療カルテの保存期間など参考になる」「医療・健康に関する院内集会で紹介したい」と 反響がありまし た。

国の来年度予算で具体化するためには、もっと多くの声を出し、市民をまきこんだ関心事にすることが大切です。そのため、愛知県被災者支援センターでは、11月29日（木）に「子ども・被災者支援法を具体化するためのあいちフォーラム（仮称）」を開催する予定です。「提言（素案）」も活用して、原発事故の被害にあった方々の生の声を反映した支援策になるように、努力していきます。

（愛知県被災者支援センター スタッフ）



寄稿

「雑感」

私は昨年 6 月、障害者団体の一員として 1 週間ほど仙台に滞在し、女川・石巻・塩釜・多賀城・七ヶ浜・利府の各市町の、障害のある方々の安否調査・支援活動に関わらせて頂きました。沿岸部を車で走っても、延々と続く惨状を目のあたりにして、あまりにも非現実的な光景にいたたまれない思いに駆られたことをハッキリ覚えています。

自然の力は甚大ですが、でも「人」の力も大きなものです。ボランティア活動を通じて「人」と「人」をつなげる大切さや、一人ひとりではどうすることも出来ない大きな困難も、それぞれが力を合わせていくことで一歩一歩前進していくのだと、実感もしました。

翻って、過日に名古屋大学黒田教室実施の、愛知県に避難されている皆さんのアンケート調査*に関わる勉強会がありました。避難されている方々は、昨年の 3・11 を境に一瞬にして経済的・精神的・肉体的等々のハンディキャップを負われました。そして、今なおそうした苦しみと闘っておられます。

アンケート調査にも「昨年の 9 月 30 日に避難準備区域から一部解除になりましたが、幼い子どもがいる世帯では不安に思って戻れないのです。子どもや若い人のいない老人の多い町になってしまいました。働く場所もなく、病院は医者・看護師不足で安心して暮らせないからです」と訴えられています。また、終の棲家を手放し、二重のローンに苦しんでいる方や、離れている家族と早く共に暮らしたい… といった声も上がっています。正に大震災を「風化」させてはならない、未解決問題が山積しているのです。

去る 9 月 22 日付で内閣府は「障害者に関する世論調査」の結果、日本社会で障害者に対する差別や偏見が「ある」と思う人は 89.2% に上がったと、公表しました。「障害者にとって住みよい社会は、障害のない人々にとっても住みよい社会です」と言われています。大震災が起こる前から、何らかの障害を負われていた方々も、愛知県に避難されていることが確認されています。困難の上に困難を強いられていることを思う時、被災された方々を始めとして、「社会的弱者」が片隅に追いやられていく社会のあり方は、変えていかなければなりません。

「震災の語り部」として活動をされている現地の方は、次のように語っておられます。「個人情報の保護の動きや、地域社会の中で一人ひとりのつながりが切られていったことも、被害を広げた。高齢で逃げるのが大変な方でも、近隣とつながりがあり助け合っていた方は、被害が少ない。逆に地域とのかかわりが薄いために、助からなかった人もいる。障害者というと災害弱者と言われるが、日頃の地域社会の中で特別な存在という見方ではなく『同じ場所、同じ時代に生きている』という気持ちを持つことが大事だ。災害時は、みんな自分の命が第一だけど、自分に近い思いを持っている人をいかに多く持つか、今回の被災者はみんな障害者です。『財布の中が空っぽ』という障害。避難所の生活では、お金がない中で、いかに幸せになれるかということが実感させられたと」…

（愛知県被災者支援センター ボランティア M. I.）

＊「愛知県に避難された方の支援のあり方を考えるためのアンケート調査」の結果概要を別途添付していますので、ご参照ください。



インタビュー 第２回

今「てんでんこ」の先に ～ 鶴島道子さん（57 歳）

私がこのインタビュー企画を思いついたきっかけは、鶴島さんの存在でした。

私自身は、放射能汚染からの母子避難で、愛知県に来ています。もともと体質が弱く、原発事故の後、ベランダに数分出ただけで湿疹が出た私は、どう努力しても汚染地域に居続けることができませんでした。鶴島さんは、津波被害で岩手県陸前高田市より、高齢のご両親とともに避難されています。家を流され、ご主人を失い、ご親戚やお友達など、大切な方の ８割方を失われました。

がれき受け入れの問題では、私は、放射能汚染を拡大してはならないと考え、反対しました。反対しながら、鶴島さんのように津波被害で避難されている方は、この事態をどんな思いで受け止めておられるだろうと胸の痛む思いでした。

特に、鶴島さんは、愛知のがれき受け入れ３候補地のひとつ、知多市に避難していらっしゃいます。私の思いをお話した上でお尋ねしました。

「愛知のがれき受け入れ問題の時、どういうお気持ちでしたか」

「陸前高田でがれきの山を見た時には、こんな光景を毎日見ていたら、心が折れると思いました。だけど、愛知と陸前高田、どちらの事情もわかる。避難してきた身で、何も言えないです。何も」

というお答えでした。私は、心に重苦しいものを抱えながら動き、鶴島さんは、心に重苦しいものを抱えながら沈黙されたのだな、と思いました。

陸前高田市の津波被害の実際についてお伺いしていて、ひとつのことに思い当たり、お尋ねしました。

「てんでんこ、ではないのですね」

鶴島さんは大きくうなずかれました。津波が来たら、各々が自分の命を守ることを最優先に全力で逃げろ、そうしなければ、地域全体が壊滅する、という先人の教えは、陸前高田にはなく、大船渡など近隣の他地域にあったものでした。鶴島さんが「本当に良いところだった。美しい自然と温かい人のつながりのある、住みよい市だった」と言われるような、陸前高田市の良さが完全に裏目に出る形での、むごい被災状況になったのでした。

今、帰って陸前高田市の復興のために働くか、愛知にとどまり陸前高田との架け橋としての役目を果たすか、揺れているそうです。ケアマネージャーとして福祉の世界で活躍されてきた鶴島さんには、どこにいても求められる役割がありますが、ひとりの個人としての鶴島さんの暮らしの事情や思いもあります。

「津波の後、てんでんこですね」

私の問いに、鶴島さんはまたうなずかれました。避難は津波の後のてんでんこ。この先、鶴島さんはどんな道を拓いていかれるのかしら、と思いながら、私自身の「放射能てんでんこ」と今後を思いました。

（愛知県被災者支援センター 編集委員
聞き手：吉田育子・小野佳奈　文責：吉田育子）



あおぞら・情報掲示板

子育て

/// 子育て支援情報 ///

ネットが使える方は下記を見ていただくと、愛知県内の情報があります。一度ご覧ください。
必要に応じて探してご活用ください。

●「NPO」の子育て支援

あい・こどもネット / 愛知県子育て支援 NPO 情報サイト
www.ai-kodomo.net/

★欲しい情報は

1. 年齢から探す
2. エリアから探す
3. カテゴリー（例：子育て仲間作り、父親の子育て、文化芸術、料理食育、育児相談、健康、仕事・再就職、講師派遣など）から探す

●「市町村」の子育て支援

あいち はぐみん Net / 愛知県子育て支援ポータルサイト
www.pref.aichi.jp/kosodate/hagumin/

★欲しい情報は

1. 市町村エリアから探す
2. カテゴリー（例：妊娠・出産、子育て、外国人、料理・食育、講師派遣など）から探す

/// コープあいち ///

子育て

・コープあいち子育てひろばについて：子どもを遊ばせながら、くつろいでいただける場です。
時間内ならいつ来てもいつ帰っても OK。予約も不要です。（託児ではありません。）
・対象：0～3歳までの子ども（未就園児を基本）と親、妊婦
・問い合わせ電話番号：（尾張エリア）052-703-6055 担当：風田
（三河エリア）0532-53-3703 担当：近田
・参加協力費：1組の親子 100 円
・13:30 ならびに 14:00 まで開催のひろばではお弁当持参で食べていただくこともできます。
・予定が変更になる場合があります。コープあいちホームページ（http://www.coop-aichi.jp/ ）又は電話にてお確かめの上、ご参加ください。

※「たんぽぽ」「ぽこ・あ・ぽこ」「しゃぼん玉」に参加される方は、公共交通機関をご利用ください。

エリア	ひろば名	開催予定	会場	住所
尾張	こんにちは	毎月第3水曜日10:30～14:00	港センター	名古屋市港区木場町2-41
	にこにこ	毎月第1火曜日10:30～14:00	みなと医療生協ふれあいセンター	名古屋市港区小賀須3-1502
	こっこ	毎月第2・4月曜日11:30～13:30	中川センター	名古屋市中川区野田2-424
	しゃぼん玉 ※	毎月第2月曜日10:00～12:00 (祝日の場合 第3月曜日)	コープ植田山3F	名古屋市天白区植田山5-2529
	め・ぐ・む	毎月第3木曜日10:00～12:00	1ツ山荘第2(南)集会場	名古屋市天白区一ツ山4-1
	つみき	毎月第3火曜日10:30～12:00	幡山公民館	瀬戸市幡山71
	どんぐりっこ	毎月第1・3月曜日10:00～12:30	コープ上八田3F	春日井市八田町7-1-13
	どんぐり山	毎月第1金曜日10:00～12:00	コープ高蔵寺2F	春日井市岩成台7-2
	たんぽぽ ※	毎月第4月曜日10:00～12:00	コープ本山2F	名古屋市千種区稲舟通1-39
	つくしんぼ	毎月第4金曜日10:30～12:00	コープ小幡2F	名古屋市守山区小幡宮ノ腰5-40
	ぽこ・あ・ぽこ ※	毎月第3月曜日10:30～14:00 (祝日の場合 第1月曜日)	コープくろかわ2F	名古屋市北区駒止町2-18
	ぽにょ	毎月第3木曜日10:00～12:00	三好センター2F	みよし市福谷町根浦7-1
	もんちっち	毎月第1火曜日10:30～12:00	知多市青少年会館2F	知多市八幡字堀切91番地の1
	にゃんこ	毎月第3火曜日10:00～14:00	蟹江中央公民館1F和室	海部郡蟹江町学戸三丁目3番地
	さくらんぼクラブ	毎月第2火曜日10:00～14:00	コープいわくら2F	岩倉市大地新町3-44
	わくわく	毎月第3火曜日10:30～12:00	稲沢勤労福祉会館	稲沢市朝府町5番1号
三河	どんぐりさんのおうち	毎月第4木曜日10:00～11:45	ふれあいコープあ・ん・ず2F	豊橋市牟呂町松崎15
	ママのリラックスタイム	毎月第1金曜日10:00～12:30	コープ岡崎北2F	岡崎市錦町5-4
	カンガルーひろば	毎月第3月曜日10:00～12:00	コープ安城よこやま くすの木ハウス	安城市横山町浜畔上81

あおぞら・情報掲示板

食品

/// くらしを耕す会 ///

全国から集めた野菜を詰め合わせるのではなく、愛知県内の農家でとれた“農薬・化学肥料ゼロ栽培”の野菜を、その生産者自身が箱詰め。こうして出来上がった野菜セットを、直接、会員のみなさんにお届けする、それが私たち「くらしを耕す会」のやり方です。昨年は会員各位の協力を得て、「あいコープふくしま」を通じ、東日本大震災の被災者の方々に 320 個の応援野菜セットをお届けしました。“おためしセット”による体験入会募集中です。

住所 ： 名古屋市昭和区広路本町４−２

TEL ： 052-851-7200

※WEB［ くらしを耕す会 ］で検索

食品

/// グリーンママンの朝市 ///

グリーンママンは、環境、平和、衣食住などなど、それぞれが関心を持ったことに活動している４人の母親のグループです。

農閑期を除くほぼ月に１度、第４火曜日、豊田市寺部町の守綱寺（http://town.machikuru.jp/syukoji/）をお借りして「グリーンママンの朝市」を開催。

近隣農業者の無農薬野菜や地元の食材でつくられた加工品などの自然食品を主に販売。素敵なママ達と出会える場所です。

問合せ先 ： 宇角佳笑　ukackey@yahoo.co.jp

健康

/// 整膚を知っていますか？ ///

健康と美と癒しをサポートします！一度受けてみませんか？

避難中の方、料金はお安く。15 分 500 円、30 分 1000 円。

丁寧！出張もあります。

●免疫力アップ、美肌、痩身 ●ニキ、痛み、むくみ、便秘改善など ★幼児・妊婦さん・お年寄りの方でも

◎要予約◎まずはご相談ください。

住所：尾張旭市瀬戸川町

TEL：080-1681-0944

e-mail：naokomatsumotoooto@docomo.ne.jp

整膚師・整膚美容師　松本尚子（いわき市出身）

健康

/// かんたんストレッチ ///

あま市から小林久美先生をお迎えし、日頃使わずに、かたまってしまった筋肉を無理なく、ゆっくり、じっくりほぐすストレッチでリフレッシュ！　60、70 代の女性が多く参加しています。子連れも大歓迎です。

活動日時 ： 第 2・4 火曜日 10 時～ 11 時半

活動場所 ： 風嶋市連尺学区市民ホーム（リボらそば）

無料駐車場あり

参加費 ： 無料（通常 800 円）

申込み・問合せ先 ： 小松 携帯 090-6223-4890

（ 8時～20時）

子育て

/// 子育て支援情報 ///

・名古屋のびのび子育てサポート事業

・つどいの広場

・愛知県内シルバー人材センター

子育て応援実施センター一覧

を、同封しています。ご参照ください。

遊び場

/// 刈谷ハイウェイオアシス ///

第２東名高速道路（伊勢湾岸道）を走っていると、観覧車がひときわ目立つパーキングエリア。食事や買い物ができるセントラルプラザ、隣接した岩ケ池公園には、ゴーカートやメリーゴーランド、大型遊具、散策路などがあります。高速道路利用者だけでなく、一般道からも利用できます。

土・日を中心に楽しいイベントも開かれています。

大観覧車は、高さ約 60m、１周 12 分。中央アルプスや名古屋のビル群も一望でき、夜景も楽しめます。１回 600 円。

天然温泉は、男女とも内風呂のほか、露天風呂やつぼ湯、あし湯コーナーも。

大人 800 円、小人（４歳～小学生）400 円。足湯 100 円。

駐車場は無料（一部の駐車場は夜間施錠）

所在地 ： 刈谷市東境町吉野 55

TEL ： 0566-35-0211（受付時間 7:00～22:00 年中無休）

※ これらは、さまざまな方々から寄せられた情報を元に掲載しています。
掲載された情報元にご確認のうえ、皆様の判断でご利用ください。

◆ 応募方法

◎ メールまたは FAX にて

E-mail ： aozora@aichi-shien.net　FAX ： 052-954-6993

◎ 文字数：1 情報につき 200 字以内

◎ 氏名・現住所・電話番号を明記してください。

（実名・匿名・ペンネームなど、掲載の表記希望をお知らせください）

※ 掲載時、こちらで編集したり、内容によっては掲載不可となる場合もあります。その他、相談させていただく場合があることを、ご承知おきください。

◆ 皆様からの情報をお待ちしています。

「愛知県に避難された方の支援のあり方を考えるためのアンケート調査」の結果概要

名古屋大学　黒田由彦

本年5月に実施した表題のアンケート調査の際には、ご協力をいただき、誠にありがとうございました。調査結果の概要を報告いたします。

まず最初に、被災時の住所を都道府県別で見ると、図１のとおりです。回答して下さった方は、1都7県にわたります。岩手県、宮城県、福島県の東北３県で94％を越えます。前回（2011年6月、愛知県被災者支援プロジェクトチーム実施、以下「前回調査」と略称）は、岩手県11％、宮城県26％、福島県59％でした。ちなみに、2012年5月11日時点で県受入被災者登録制度の登録状況は、岩手県9％、宮城県23％、福島県が59％ですので、アンケート調査の結果と大きな乖離はないと判断されます。

表１　被災時住所（都道府県）

都道府県名	絶対度数	相対度数
岩手	12	7.8%
宮城	30	19.6%
福島	102	66.7%
茨木	5	3.3%
栃木	1	0.7%
千葉	1	0.7%
東京	1	0.7%
神奈川	1	0.7%
計	153	100.0%

被災時の住所を市町村別で見ると、福島第一原発事故の警戒地域が9％、一部が警戒地域が20％で、それ以外の福島県内が43％、それ以外が29％です。立ち入りが制限・禁止された地域から避難してきた人が全体の約3割を占めています。

現住所は愛知県全域に散らばっており、前回調査と同様の結果でした。現在の住居形態を図２に示します。何らかの形で家賃補助のある住居に住んでいる人が半数以上を占めている。図３は家族類型です。この家族類型を被災時住所都県別に見たのが図４です。母子・父子の家族が福島県に多いことが見て取れます。被災地に家族のどなたかがまだ残っているかを被災時居住都県別に見たのが表５です。やはり福島県が多くなっていますが、岩手県も同様に多いことがわかります。

次に、愛知県に避難した理由を尋ねた結果が、表６です。親や親戚の勧め、自分や家族が以前

表２　現在の住居の形態

形態	絶対度数	相対度数
県営・市営住宅	40	25.5%
県および名古屋市の住宅供給公社	10	6.4%
UR賃貸住宅・雇用促進住宅	4	2.5%
民間アパート・マンション（県借り上げ制度利	37	23.6%
民間アパート・マンション	22	14.0%
企業から提供された社宅・社員寮	4	2.5%
家族・親族宅	31	19.7%
知人・友人宅	4	2.5%
その他	5	3.2%
計	157	100.0%

表３　家族類型

家族類型	絶対度数	相対度数
単身	18	11.6%
母子・父子	43	27.7%
夫婦	24	15.5%
核家族（夫婦＋子ども）	40	25.8%
三世代	24	15.5%
その他	6	3.9%
計	155	100.0%

表４ 被災時住所4分類 と 家族類型 のクロス表

			家族類型						
			単身	母子・父子	夫婦	核家族（夫婦＋子ども）	三世代	その他	合計
被災時住所4分類	岩手	度数	4	0	1	1	5	0	11
		被災時住所4分類 の %	36.4%	0.0%	9.1%	9.1%	45.5%	0.0%	100.0%
	宮城	度数	6	6	8	6	3	0	29
		被災時住所4分類 の %	20.7%	20.7%	27.6%	20.7%	10.3%	0.0%	100.0%
	福島	度数	6	30	14	31	15	6	102
		被災時住所4分類 の %	5.9%	29.4%	13.7%	30.4%	14.7%	5.9%	100.0%
	その他	度数	1	7	0	0	1	0	9
		被災時住所4分類 の %	11.1%	77.8%	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	100.0%
合計		度数	17	43	23	38	24	6	151
		被災時住所4分類 の %	11.3%	28.5%	15.2%	25.2%	15.9%	4.0%	100.0%

表５ 被災時住所4分類 と 残った家族員の有無 のクロス表

			残った家族員の有無		
			いる	いない	合計
被災時住所4分類	岩手	度数	5	6	11
		被災時住所4分類 の %	45.5%	54.5%	100.0%
	宮城	度数	8	21	29
		被災時住所4分類 の %	27.6%	72.4%	100.0%
	福島	度数	49	51	100
		被災時住所4分類 の %	49.0%	51.0%	100.0%
	その他	度数	7	2	9
		被災時住所4分類 の %	77.8%	22.2%	100.0%
合計		度数	69	80	149
		被災時住所4分類 の %	46.3%	53.7%	100.0%

住んでいた人が多いですが、福島とその他の都県の場合、放射能を避けるために愛知県を選んだ人が多いという結果となっています。

アンケート調査の時点で、被災前に住んでいた市町村に戻るかどうかを尋ねたところ、「はい」と回答した人が30%、「いいえ」が70%でした。後者について

表６　愛知県に避難した理由

理由	岩手	宮城	福島	その他
愛知県に住む親・子ども・親戚から勧められた	58.3%	63.3%	47.1%	22.2%
愛知県に住む友人・知人から勧められた	8.3%	6.7%	15.7%	11.1%
支援制度が整っていると聞いた	0.0%	3.3%	8.8%	0.0%
自分や家族が以前住んでいた	8.3%	23.3%	21.6%	66.7%
仕事が見つかりそうだった	16.7%	23.3%	13.7%	11.1%
原発や放射能の影響が少ないと考えた	16.7%	26.7%	53.9%	55.6%
N（回答者数）	12	30	102	9

その理由を被災時居住都県別に尋ねた結果が表７です。復興のめどがたっていないと回答した人が岩手県に多く、他方、放射能による被曝を避けるためと回答した人が福島県、その他の都県が多いのが特徴です。宮城県は中間的な性格を示しています。

表８は、被災時居住都県別にこの先定住する場所についてどのようにお考えかを尋ねた結果です。総じて、愛知県に定住すると考えている人と現時点ではわからないと回答する人に分かれています。

表７　「いいえ」の理由

理由	岩手	宮城	福島	その他
以前住んでいた地域の復興のめどがたっていない	77.8%	40.9%	34.7%	0.0%
愛知県が気に入った	33.3%	13.6%	22.2%	14.3%
放射能による被爆を避けるため	0.0%	18.2%	79.2%	85.7%
N（回答者数）	9	22	72	7

表８ 被災時住所4分類 と この先定住する場所 のクロス表

			この先定住する場所					
			愛知県に定住することを考えている	被災前にすんでいた住居に戻ることを考えている	被災前に住んでいた地域の近くに戻ることを考えている	上記以外の場所に定住することを考えている	現時点ではわからない	合計
被災時住所4分類	岩手	度数	4	2	1	1	4	12
		被災時住所4分類 の %	33.3%	16.7%	8.3%	8.3%	33.3%	100.0%
	宮城	度数	14	3	3	1	9	30
		被災時住所4分類 の %	46.7%	10.0%	10.0%	3.3%	30.0%	100.0%
	福島	度数	39	15	8	2	38	102
		被災時住所4分類 の %	38.2%	14.7%	7.8%	2.0%	37.3%	100.0%
	その他	度数	2	2	0	1	4	9
		被災時住所4分類 の %	22.2%	22.2%	0.0%	11.1%	44.4%	100.0%
合計		度数	59	22	12	5	55	153
		被災時住所4分類 の %	38.6%	14.4%	7.8%	3.3%	35.9%	100.0%

愛知県被災者用賃貸住宅借上制度を利用している人に対して、2年後家賃が発生したときの見通しを尋ねたところ、79名の方から回答を頂きました。払える見通しがあると回答した人は18%、払える見通しがないが28%、いまのところわからないが37%、その他が18%という結果でした。家賃負担に不安を抱えている家計の状況がうかがえます。毎月の家計の状態について尋ねたところ、余裕があると回答した人は2%、余裕はないが生活はできるが57%、ぎりぎり生活できる水準が22%、足りないが20%でした。ぎりぎり生活できる水準と足りないを合わせると42%となり、4割の家庭で厳しい状況にあることがわかります。

表９　生活費の工面（複数回答）

内容	
自らが働いて得た収入	47.8%
被災地にいる家族からの送金	21.0%
愛知にいる親戚・知人の援助	8.9%
貯金の取り崩し	48.3%
失業保険	5.1%
生活資金貸付などの公的資金	4.5%
東京電力からの賠償金	23.6%
義捐金などの支援金	15.9%
その他	21.0%
N（回答者数）	157

表10　貯金の切り崩し と 家計リコード のクロス表

			家計リコード			
			余裕あり	足りている	ぎりぎり＋足りない	合計
貯金の切り崩し	0	度数	3	57	26	86
		貯金の切り崩し の %	3.5%	66.3%	30.2%	100.0%
	1	度数	0	30	38	68
		貯金の切り崩し の %	0.0%	44.1%	55.9%	100.0%
合計		度数	3	87	64	154
		貯金の切り崩し の %	1.9%	56.5%	41.6%	100.0%

では、どのように生活費を工面しているかを見たのが表９です。割合で多いのは、貯金の取り崩し、自ら働いて得た収入であり、次いで東京電力からの賠償金、家族からの送金が続いています。なお、収入先の数が１つだけと回答した人は38%で、あとの62%が複数の収入先があると回答していおり、複数の収入を組み合わせながら、生活していることがうかがえます。

貯金を取り崩すことは家計にとって好ましいことではないことを考え、貯金の取り崩しをしている人とそうでない人で、家計の状況がどうかを見たのが表10です。そこから、貯金を取り崩している家庭の方が家計に余裕がない状態であることが浮かびあがってきます。

表11　必要な支援（複数回答）

内容	
住宅	38.2%
生活用品	26.8%
生活資金	7.6%
健康・福祉	34.4%
教育資金	15.3%
子供の学習	25.5%
子供の進学相談、情報提供	20.4%
就労支援	26.1%
被災地復興状況に関する情報提供	34.4%
支援制度に関する情報提供	36.9%
賠償請求に関する情報提供・相談	28.7%
二重債務等に関する情報提供・相談	5.1%
情報誌（あおぞら）の定期的発行	24.8%
避難者同士の交流支援	21.0%
身近な地域の医者や店の情報	36.3%
家族や子供の病気など、いざいという時に頼める相手や場	22.3%
なんでも気軽に話したり，相談できたりできる相手や場所	26.8%
離れて暮らす家族の食生活け健康、日常生活支援	28.7%
自分ができることを見つけたい	17.2%
N（回答者数）	157

家計にとどまらず様々な問題に直面していると予想されますが、どのような支援や情報が必要かを複数回答で尋ねた結果が表11です。3割以上の方が必要だとお考えの支援が、住宅支援、健康・福祉に関する支援、被災地の復興状況に関する情報提供、支援制度に関する情報提供、身近な地域の医者や店の情報提供の５つです。四分の一以上の方が必要だとお考えの項目が、生活用品の提供、子供の学習支援、就労支援、賠償請求に関する情報提供・相談、なんでも気軽に話したり、相談できたりする相手や場所、離れて暮らす家

族の食生活や健康、日常生活への支援の６つとなっています。

避難している方同士の交流会については、ほとんどの方（94%）が認知していますが、参加したことがあるかどうかについては、参加したことがあると回答した人が43%、参加したことがないが57%と分かれています。今後、交流会に参加しますかとお尋ねしたところ、参加すると回答した方が48%、参加しないが52%とやはり態度は割れています。交流会への参加経験の有無と今後の参加するかどうかのクロス集計が表12です。参加した経験がある人はこれからも参加すると回答し、参加した経験のない人はこれからも参加しないと答える傾向のあることが明らかです。

表12　参加の有無 と 今後の交流会への参加意思 のクロス表

			今後の交流会への参加意思		
			参加する	参加しない	合計
参加の有無	参加したことがある	度数	46	15	61
		参加の有無 の %	75.4%	24.6%	100.0%
	参加したことはない	度数	22	58	80
		参加の有無 の %	27.5%	72.5%	100.0%
合計		度数	68	73	141
		参加の有無 の %	48.2%	51.8%	100.0%

今後も交流会に参加しないと回答した人に、その理由を複数回答で尋ねた結果が表13です。比率の高い項目を挙げると、開催場所が遠く、交通手段がないが38%、仕事や子どもの部活動で日時があわないが約26%、自分は参加する対象にあてはまらないが約22%、場の空気があわないが約20%、被災者という立場に抵抗があるが約20%、です。最初の二つからは、交流会そのものに対しては興味はあるけれども、都合がつかないので参加していないだけという事情が読み取れます。最後の二つについては、交流会そのものに消極的な気持ちが示されていると解釈できます。

表13　交流会に参加しない理由（複数回答）

内容	
自分は参加する対象にあてはまらない	21.7%
仕事や子どもの部活動などで日時があわない	25.8%
開催場所が遠く、交通手段がない	38.0%
家族の介護や体調が良くない	8.7%
自分の体調や慣れない場所のため参加できず	16.3%
場の空気があわない	19.6%
他の参加者が少ない	4.3%
有用な情報が入手できない	7.6%
マスコミなどの取材を受ける	17.4%
プライバシーが侵害される	9.8%
被災者という立場に抵抗がある	19.6%
その他	22.8%
N（回答者数）	92

表14　交流会の意義（複数回答）

内容	
被災者同士のネットワークづくり	45.9%
現在の生活の情報交換	51.6%
同郷の人たちとのコミュニケーショ	54.1%
支援団体や支援者とのつながり	36.9%
その他	10.2%
N（回答者数）	157

交流会の意義について複数回答で尋ねた結果が表14です。やはり同郷の人たちとのコミュニケーションを挙げる方が約54%と一番多く、現在の生活の情報交換が約52%、被災者同士のネットワークづくりが約46%となっています。

紙幅の関係でここでは紹介できませんが、自由回答欄に沢山の方々からご意見やいまのご心境をお書きいただきました。近々作成する報告書には掲載する予定です。